



暗夜

志水辰夫



暗夜

志水辰夫

マガジンハウス

志水辰夫

1936年高知県生まれ。26歳で上京。出版社勤務、フリーライターを経て、81年『飢えて狼』で作家デビュー。86年『背いて故郷』が推理作家協会賞。他に『行きずりの街』『滅びし者へ』『帰りなん、いざ』『いまひとたびの』『あした蟬蛸の旅』『情事』など多数。

暗夜

二〇〇〇年三月二三日 第一刷発行

著者——志水辰夫

しみずたつお

発行者——細川 泉

発行所——株式会社マガジンハウス

東京都中央区銀座3-13-10 〒104-8031

電話 書籍販売部 〇三(三五四)七二七五

書籍編集部 〇三(三五四五)七〇三〇

印刷所——三松堂印刷

製本所——積信堂

写真・装丁——花村 広

©2000 Tastuo Shimizu Printed in Japan

ISBN4-8387-0617-0 C0093

乱丁・落丁本は小社書籍販売部宛にお送り下さい。

送料小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーと帯に表示してあります。

本書の無断転載を禁じます。

暗夜

ドアを開けると、空家特有の日向臭い匂い^{ひなた}が鼻をついてきた。乾いた淀みとでもいった生ぬるい空気がたれ込めている。歩くとスリッパの跡がついた。フローリングの床に埃が溜まっているのだ。とりあえず家中の窓を開け放して回った。

部屋は四階にあり、居間が南に面していた。日当たりがよくて左前方に中野サンブラザの黒い建物が見える。眺めそのものはいしたことがなかった。向かいで工事中のマンションが完成すると、視界はさらに狭められるだろう。駅に近いのが取り柄か。中央線を行く電車の音がときどきこだましてきた。

流しの横にあった灰皿を持ってきて、煙草をつけた。テーブルに寄りかかり、部屋のなかを見回す。オイルレザアのソファ、アーリーアメリカン調の食器棚、引き戸式のサイドボード、壁にはめ込みになっている鏡、5KGの表示がある鉄アレイ、CDコンボ、ワイドテレビ、ビデオの再生セット。

書棚の一部をビデオテープが占拠していた。映画のタイトルがおよそ七、八十本。隆二はビデオおたくだった。

玄関で声がした。管理人の尾崎がやってきたものだ。上がってくれ、と榊原俊孝は言った。

「だれが掃除をしたんですか？」

「はい。おかあさまがいらっしゃいましたから」

「母が？」

「と言いましても、掃除のほうは業者を呼ばれたんです。三日ほど泊まってゆかれました。警察のほうから、部屋のなかを見せて欲しいと言ってきたものですから」

尾崎は六十半ばくらい、一階の103号室に住んでいた。はじめに出てきた女は、多分女房だったのだろう。この部屋のキーは、いま彼のところから受け取ってきた。

「警察が来たとき、おたくは立ち合っただけですか」

「ええ、はじめのうちだけです」

「そのとき、部屋はどれくらい荒らされました」

「それほどひどくはなかったですよ。わたしのほうはわからなかったくらいですから。警察の方に、何者かが忍び込んでいると言われてはじめて知ったようなわけで。かさばらない、金目のものだけ持って行つたみたいですね。ただ、二、三回は入ってきてるようだと言われて、それがちょっと申し訳なかったんです」

「ふだん、どういう人間が出入りしていたか、心当たりはないんですか」

「ええ、全然」

首をすくめてすまなさそうに言った。顔色の悪い男だ。口臭を気にしているらしく、口許へさかに手を持ってゆく。

「一応玄関はオートロックになってますけど、その気になれば、いくらでも入ってくる方法はあるわけですから。ふつうの格好で、ふつうに入ってこられた日には、チェックのしようがありません。

まして警察の話だと、賊は、合鍵を持っていたんじゃないかということでしたので」

「べつにおたくを咎めてるわけじゃありませんよ。ここからなにか持ち出したのを、見てないかと思っただけ」

「申し訳ありません。気がつかなかったんです」

「母はどういうふうに言っていました？」

「どういうふうにとは？」

「なくなったものについて」

「ロレックスの腕時計がなくなっていることには気がつかれました。しかし、ほかのことはわかりませんとおっしゃって。これは恐らく、榊原さんご本人しかわからないことじゃないかと思います。さいわい、預金は引き出されてなかったようですが」

「ここへ女性を訪ねてきたことは？」

「それは一度も見えておりません」

俊孝は疑わしそうな顔で管理人を見つめた。尾崎はひるまなかった。というより、俊孝の疑問の意味がわからなかったようだ。

「警察はなにか持って行きました？」

「ええ。わたしは立ち合っておりませんが、段ボール箱でいくつか、捜査資料を持ち出したところは見えております。これはのちほど、おかあさまのほうへ返されたと聞いておりますが」

冷たい風が入ってきた。俊孝は窓を閉めた。

「その、掃除してくれる業者というのを呼べますか」

「いまからですか」

「ええ、早いほうがいい。大掃除をさせてもらいたいです。ダニがわいているかもしれないから、消毒、殺菌、寝具の乾燥、できることは全部やらせてください。電気、ガス、水道の手続きもお願いします」

「鍵はどうなさいます?」

「鍵? ああ、これか。いいでしょう。しばらくようすを見ます」

「わかりました。電話のほうはどうなさいます?」

「できるんですか」

「いえ。これはご自分で手続きしていただかなきゃなりません」

「じゃあ自分でやります。当面は携帯を持っていますから、なにかあったら、こっちに連絡してください。きょうはホテルに泊まりますので」

電話番号をメモ用紙に書いて尾崎に渡した。

「じゃあちょっと電話してきます。すぐ間に合うかどうか、わかりませんので」

尾崎はそう言って出ていった。俊孝は改めて部屋を調べはじめた。間取りは2LDKである。十五、六畳大のリビングルームに、六畳大の洋間がふたつついている。洋間は玄関の両脇にあって、右側の部屋にはセミダブルベッドが据えられていた。

クローゼットには隆二の衣類がそのまま残っていた。といって、俊孝が使えるものはなかった。

隆二は身長が百八十、体重が九十という大男だった。年は十二ちがうし、好みにいたってはもっとちがった。隆二は俊孝とは正反対の、どちらかといえばケバくて、えぐいセンスの持ち主だった。

もうひとつの部屋は書斎になっていて、デスクトップ型パソコンが一式据えられていた。両袖机の上のカレンダーは九六年九月を表示したままだ。

左の壁面はつくりつけの書棚になっていた。中国の骨董、陶磁器、古美術に関する本が三、四十冊収納してあった。陶磁器に関するものが三分の二を占める。大型のビジュアル本から安直な入門書まで玉石混淆の感があり、手当たり次第という気がしなくてもなかった。古美術展の会場で売られているカタログまである。

灰皿があったので新しい煙草に火をつけ、椅子に腰を下ろした。書棚から本を一冊抜き出すと、めくりはじめた。唐三彩の解説本だった。ページの感じからすると、かなりの頻度で読み込まれている。

ポケットの携帯が鳴りはじめた。尾崎からだった。

「業者を呼んでかまいませんか。二十分くらいで来られるそうですが」

「お願いします」

やってきたのはユニフォーム姿の女だった。作業帽とジャンパーに「ハウスキーピングのナイトー」というイニシアルが縫い込んである。年が三十半ば、髪が多すぎて帽子からはみ出していた。唇も、爪も赤く、商っているものはほかにもあるとでも言いたそうな笑みを浮かべていた。

「すみませんが、二、三日お時間をいただけますか。スケジュールが立て込んでまして、あす一日では手が回りがねるんです」

一緒に部屋を回った。女は仕様書なるものを持っていて、それに作業項目がすべて書き出してあった。すべての項目について、ここはどうするか、いちいち聞いてくる。主婦の目で、ということをかかんに力説した。スタッフ全員が女性なのだという。終わるとその場で費用の概算が出た。

作業日程の説明を聞いているとき、つぎの来客がやって来た。男がふたりだった。彼らは女が帰るまで、廊下に立って待っていた。どうやら尾崎が知らせたようだ。

年取っているほうの大崎とは二度目だった。年が五十くらい。体形がくずれているものの、骨格の大きな、百キロ近くありそうな偉丈夫である。腕の太さや耳のつぶれ具合を見ると、若いときは柔道をやっていたようだ。えらの張った角張った顔に、細くて眠そうな目がのっかっていた。その顔を武器にしていることは、表情をまったく見せないことからわかる。

もうひとりとは春山といった。上背はあるが威圧感のない華奢な体格で、三十後半くらいなのに少年のようなあどけない顔をしていた。終始浮かべていた照れ隠しのような笑みは、警官になったことをいまでも当惑しているように見える。とうとう最後まで一言もしゃべらなかった。

「いつこちらへ？」

居間のソファで向かい合うと、大崎は煙草を取りだした。

「さっきです。東京駅から直行してきました」

「すると、出られたのは？」

「さきおととい」

「それはそれは、ご苦労さまでした。多少は早く出られたんですか」

「いや、まるまる四年」

大崎はやや困ったような顔をした。言い返す言葉に窮したのだ。

「それで、これからはこちらに住まわれるんですか」

「向こうに荷物が置いてありますのでね。当分は行ったり来たりになると思います」

「この部屋、当時のままみたいです、どう思われました？ なにか、気がつかれたことは」

「ありません。ここへは一遍も来たことがないと、まえに言いませんでしたか」

「いや、そうじゃなくて、弟さんの持ち物で、なになくなっていないとか、あれがなければおかし

いとか、そういうことに気がつきませんでしたか、ということですが」

「ありません。弟とは、二十年以上一緒に暮らしてないんです。そういう質問でしたら、母のほうがよかったと思いますけど」

「もちろんおかあさまにもお聞きしました。ロレックスの時計がなくなっていることには気がつかれましたけどね。あと、手提げ金庫もあったはずだということでした」

俊孝はかぶりを振って、部屋のなかを見回した。

「ぼくにはまるっきり他人の家も同然なんです。来たときから戸惑いっぱなしでした。弟の思い出につながるものがなんにもない」

「まえにうかがった話だと、けっこう仲良くしてらっしゃった、ということでしたが」

「兄弟としてはそうでしたよ。母もふくめ、三人でうまくやっていたつもりです。でなきゃこの家を、母がぼくに使わしてくれるわけないでしょう」

「なんかうらやましい話ですね。これだけのマンションを、三年も遊ばして平気なんだから。正式な贈与を受けたんですか」

「それはまだです。ぼくの前歴が前歴ですから、いま自分のものにする、黙ってない人間が出てきそうで」

「やっぱり、もてる人たちは鷹揚なんだ。新華通商を弟さんに譲られたのも、無償だったみたいだし」

といった言葉には明らかに皮肉がこめられていた。

「あれは手塩にかけた会社を、巻き添えにしなくなかったからです。それなりに苦労しましたし、虚業とは関係ないまっとうな会社でしたから愛着もありましたしね。そりゃ最悪の場合の、資産隠

し的な意味も、ないことはなかったんです。弟だったら遠隔操作できるみたいな腹づもりはありましたから」

「それが、いつごろから思うようになくなりました」

「というより、ぼくのほうがどうでもよくなってきたんです。一度あぶく銭のうま味を知ってしまうと、なかなか元のところへは引き返せないんですよ。いざれ行き詰まるのが目に見えていても、日銭が入ってきている間は、先のことなどどうでもよくなってしまいうんですね」

「すると新華通商を売る、という話が出たとき、反対はしなかったんですか」

「ええ。弟から投げだしてもいいかと言われたときは、好きにしろと答えました。ただ、子飼いの社員が四、五人いましたから、彼らがあまり不利をこうむらないよう、身の立つ方法を考えてやってくれと、注文をつけただけです」

「その段階で、弟さんは、これから古美術をやるというようなことを、言ったか、匂わせたかしなかったんですか」

「まったくしませんでした」

「どうしてそういう方向へ逸れてしまったか、思い当たることはありますか？」

「それをぼくだって知りたいんです。この三年間、ずっと考えてきましたから。少なくとも、ぼくのほうに思い当たることはありません」

「書斎の本をごらんになりました？」

「ええ。さっき」

「どう思われました。状況証拠としての本しか残ってないんです。パソコンのなかまで全部消してある」

「すると警察は、いまでも古陶磁の輸入にまつわるいざこざが原因だと見ているんですか」

「そう思うしかないんです。弟さんの痕跡が、日本社会のどこからも出てこないものですから。といて、中国からだっただけ出てくるということでもないんですけどね。古美術業界での聞き込みは、しらみつぶしにしてみました。それなのに弟さんの名は、どこからも聞こえてこない。われわれも遊んでるわけじゃありません。お蔵入りにはさせたくないから、歯を食いしばっていても捜査をつづけてます。それがすべて徒労に終わっている。生前のつき合いや、中国とのこれまでの関係を考えたら、トラブルの原因は日本人ではないと、結論づけざるを得ないんです。ただそうなればなつたで、解決はむずかしいかもしれません。向こうに足場がなんにもありませんから。犯人がわかってれば、中国当局に交渉して、引き渡しの要求もできます。そこまできかないから、悔しいんです。こういう事実上の敗北宣言をしなければならないのは、何としても残念なんですが」

「これまで、どういう中国人の名が浮かび上がってきました？」

「少なくともありません。しかし業務を通して知り合ったと思われる人間は、みな身元が確実で、疑う材料はなにも出ておりません。仕事ではない、プライベートな交友範囲となると、これがわからないんです」

「うさんくさい連中とのつき合いはなかったんですか」

「ないことはないと思うんですけどね。しかしこれまで、弟さんの名は、警察のあらゆるリストに一回も出てきてないんです。雪のように真っ白。だからどうしようもない」

大崎はいくらか自嘲的に言った。つぎの煙草を手を持ったまま、無意識にもてあそんでいる。春山のほうは吸わなかった。

「東京にいる不良中国人は、だいたい出身地ごとに徒党を組んでいるものなんです。北京、上海、

広東、福建、といったところがいまの日本での主だったところですけどね。そういうグループとも、関係を持っていた形跡がない。むしろこういうことだったら、榊原さんのほうが詳しいんじゃないかと思うんですけど」

「しかし、ぼくは現場を離れて十年以上になりますから。その後の時代変化や、経済の移り変わりを考えると、いままでの知識は役に立たない、というよりむしろ有害じゃないですか。ぼくだったらむしろ、白紙で考えようと思いますが」

「ぜひ考えてみてください。そしてなんでもいいですから、思い出したことや、気づいたことがあったら、知らせてくれませんか。われわれだってけっして忘れているわけじゃありませんから」

これまで彼らがチェックした中国人の名前を聞き、メモした。ひとりとして心当たりのある名はなかった。中国人の姓は三百しかない。同姓同名は避けられない民族なのだが、そういう重複すらなかった。

帰り際に、大崎がさりげない顔でいった。

「榊原さんは、これまで密輸にかかわったことはないですよ」

俊孝は顔を上げて大崎を見つめた。

「そういう疑問をたしかめるために来たんですか」

大崎は瞬きも見せなかった。壁のような顔になって俊孝を見返した。

「念を押しているだけです」

「ぼくの履歴にそれを疑わせるものがありましたか？」

「ないからお聞きしたんですけどね」

「ほくだったら、もっと安直に金を稼ぐと思いませんか」

「でしようね。気を悪くしたんだったら謝ります」

煙草の吸い殻を三本残して大崎は帰って行った。俊孝は見送りにも出ず、煙草をくゆらせながら天井を見上げていた。西日がビルの向こうへ消え、にわかには部屋がうそ寒くなってきた。

2

母とはかれこれ五年ぶりだった。このまえ会ったのは南房シルバービレッジの老人たちと、京都へ観光旅行に来たおりのことだ。宿へ訪ねて行って二日ほど行動をとにした。七人のうち車椅子が四名いて、総勢が十五名という手間のかかる旅行だった。

体軀が一回り小さくなっていた。腰の曲がり具合もまえより大きくなったような気がする。七十には間があつて、それほど老け込む年ではないのだが、牀のバランスが悪いということは、それだけ余計なエネルギーを消耗させるのかもしれない。白髪も増えていた。

「おかあさん、動かなくていいよ。お茶ぐらいぼくがいれます」

俊孝が台所に立とうとすると、母は手を振ってさえぎった。

「庇かばってくれなくていいわよ。見苦しいかもしれないけど、見かけほど難儀なわけじゃないんだから。そりゃ動かないほうが楽にはちがいないけどね。そんなことをしていると、ほんとに関節が錆びてしまうから。ビレッジのなかじゃ車椅子も使わないことにしてるのよ。歩行器はまあしうがな
いけど」

俊孝が訪れたとき、花枝はその歩行器につかまって庭を歩いているところだった。彼女が気づく

まで、俊孝は庭の入り口に立って見つめていた。歩行に必ずしも苦痛が伴うわけでないのは、見ていてもわかる。事故の後遺症で、左右の足の長さが数ミリ食い違ってしまったのがいちばんの原因だ。したがって歩行器なしでも、歩こうと思えば歩けるのだ。ただ歩くたび、上体が左右へぎくしく揺れる。はた目にはいかにもつらそうに見えるのだった。

ここの老人ホームには四十いくつの部屋があり、それもすべて個室になっていた。間取りや広さはみな同じ。六畳の和室と八畳大の台所兼リビング、それにテラスがついている。食事は食堂でとるのを原則としているようだが、自室で食べてもよいし、自炊をしてもよい。個人の自由を重んじる、というのがここのやり方だ。はつきりいえば、わがままを認めるわけである。金持ちしか集まっていないから、そういう我を通すことに慣れたものばかりなのだ。

現在の入居者は夫婦が三分の一弱、あとは独身者か、連れ合いに先立たれたものだという。入居者同士の交流は盛んで、ここで知り合って、あらたに夫婦縁組みするものも年に数組あるとか。ロビーの掲示板には、サークルや行事の案内がいくつも貼り出されていた。

俊孝たちはリビングの食卓で向かい合っていた。和室には座卓が据えてあって、花枝はそちらに案内しようとしたのだが、椅子のほうが立つとき楽だろうと、俊孝が勝手に気を回したのだ。

花枝は二回往復して、急須や湯呑みを運んできた。湯はポットが使われている。茶葉は玉露だ。

「ほんとになにも持ってこなくてよかったんですか」

「なにいつてんの。空也の最中もなかを買ってきてくれたじゃない」

「そうじゃありません。隆二のもんです。手元に置いときたいものはないんですか」

「その話だったらもういいわよ。いまさらそんなものがあつたって、あればなまじつらいというところもあるだろうし」